

# 親子の信頼感尺度作成の試み

## —青年期の子が信頼する親のイメージ—

吉田美奈<sup>1)</sup>・浜崎隆司<sup>2)</sup>・岡本かおり<sup>3)</sup>

### An Attempt to Create a Parent–Child Confidence Scale : Image of Parents Trusted by Adolescent Children

In this study, we developed a scale to measure the confidence of parents of adolescent children (parent-child confidence scale), verified its reliability and validity, and examined its concept. The purpose was to find the image of a trusted parent. We asked university and graduate students for free descriptions about “trusted parents” and sorted their answers into 47 items. Using items related to “trusting others” and “distrust” from the “trust (confidence) scale” by Amagai (1995, 1997), we added 18 items to make a questionnaire with 65 questions. As a result of factor analysis of the answers obtained in the questionnaire survey, the three factors of “acceptance,” “respect” and “belief” were extracted. As a result of examining the reliability and validity (of the scale), it was shown to be generally acceptable. For an adolescent child, a trusted parent is a person who deserves respect, who accepts and respects the child as himself/herself, and who lives with firm beliefs and aspirations, according to the concept of the scale.

#### I 問題と目的

##### 1. 先行研究の概観

###### 1.1 親子の関係性

昌子(1985)は、親子関係を「一種の人間関係」「支配・被支配の関係」「選ぶことのできない関係」と表現し、「まったく選択することを許されない関係であって、また、『赤の他人』になることは一生許されないといった二重のワクのはまった人間関係というものは、この親子関係以外にはない。だから、この親子関係の中に一度破綻が生じたら、それこそ取り返しのつかないような惨状が現出することになる。」とも述べている。

このように、親子関係は子どもにとって自らの人生を左右しかねない人間関係であり、親子の相互作用によって関係性が構築されると考えられる

のであるが、親子関係に影響を与える重要な要因の一つとして、信頼関係の有無が従来から指摘されている。例えば、信頼関係の有無は、親からの叱りの受け止め方に影響を与える(松田・小嶋; 2002)。また、叱られる原因行為の修正には母子間の情緒的な関係の安定性を子どもが認識していることが必要であるという藤田・丸野(1992)の研究もある。ほかに、児童期や思春期においては親子間の信頼関係を基盤とするしつけや管理、サポートが子どもの反社会的傾向や問題行動に影響を与えることが報告されている(Farrington, 1978; Patterson, 1986; Flannery, Williams& Vazsonyi, 1999; Fondacaro&Heller, 1983; Wills&Cleary, 1996)。

###### 1.2 信頼の構成概念

「信頼」がどのような概念を指すのかについては、山岸(1998)が、最も広い定義から出発し、概念の整理をしつつ「信頼」の構成概念を絞り込んでいる。山岸(1998)は初めに、「信頼」が多

1) 四国学院大学社会福祉学部

2) 鳴門教育大学大学院

3) 洗足こども短期大学

義にわたって使用されていることを指摘し、Barber (1983) による「信頼」の最も広い定義について考察を加えた。まず初めに、信頼がより複雑な情報処理によってもたらされるという考えのもと、最も広い意味での定義である「自然の秩序に対する期待」と「道徳的秩序に対する期待」から、「明日も日は昇るだろう」というような情報処理の単純化（いわゆる「認知的ケチ」という言葉で表されるような、興味のないものや、情報や知識を十分に持っていないことに対して、少ない労力で判断しようとする心理効果）によりもたらされる前者を除外した。次に、「道徳的秩序に対する期待」をBarber (1983) による下位分類を援用しながら「相手の能力に対する期待」と「相手の意図に対する期待」の2種類に分類した上で、「相手が自己利益のために搾取的な行動をとる意図をもっていると思うかどうかに関わる限りでの信頼」ではないことから前者を議論の対象から外した。

そしてさらに、この「相手の意図に対する期待」に、まだ相手の意図についての情報が必要とされ

ながら、その情報が不足している状態を指す「社会的不確実性」の存在を前提としない「安心」と社会的不確実性の存在を前提とする「信頼」が含まれていることを示し、山岸 (1998) 自身の定義による信頼（社会的不確実性が存在しているにもかかわらず、相手の、自分に対する感情までも含めた意味での人間性のゆえに、相手が自分に対してそんなひどいことはしないだろうと考えること）に含まれない前者を除外した。最終的に、ここまでで見出した「信頼」を相手が人間である以外に何もわからず、“デフォルト値”として用いざるを得ない「一般的信頼」と、特定の相手に関する情報を利用して行う、相手の信頼性の判断である「情報依存的信頼」とで区別し、さらに「情報依存的信頼」を「相手が誰に対しても信頼に値する行動をとる傾向を持つ人間であるという期待（人格的信頼）」と、「他の人間に対してはともかく、自分に対しては信頼に値する行動をとる傾向を持つ人間であるという期待（人間関係的信頼）」に区別した (Figure 1)。

具体的に考えてみると、例えばAが何らかの行

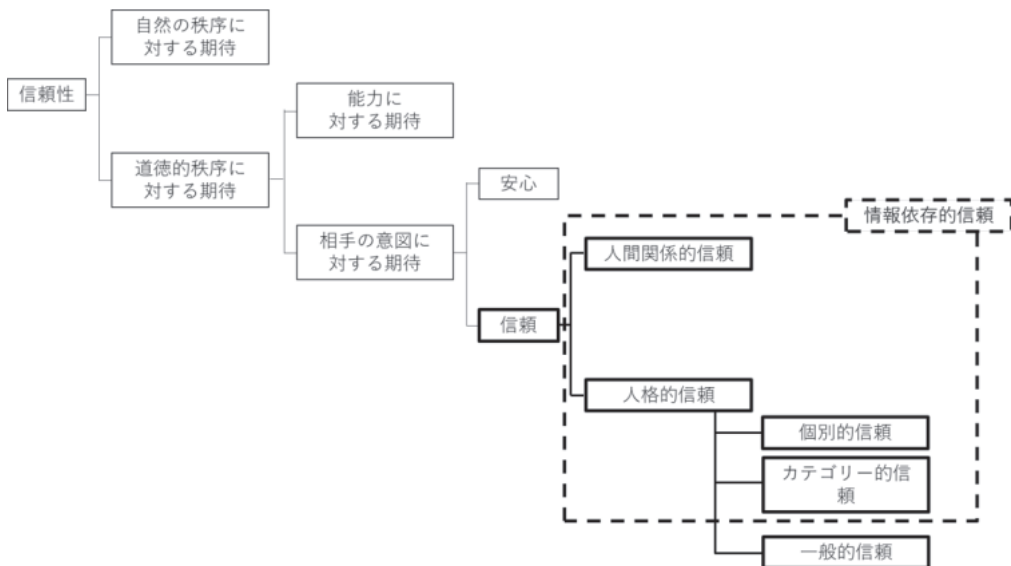


Figure 1 信頼についての概念的整理図

出典：山岸俊夫、2004、P47の図2.1を一部変更表示。

動をBに依頼しようと考え、そのことを第三者に説明しようとする場合、「〇〇氏は信頼に足る人物だ」というような表現を使用することがあるが、そこには一般的に、AがBについて十分な情報を持ち合わせていることを前提とした、つまり、社会的不確実性が存在しない状態における「Bならばやり遂げられる（役割を遂行する能力を持ち合わせている）」という期待があり、同時に「Bが自己利益追求のために依頼した行動を途中で投げ出すようなことはないであろう」という期待も含まれているものと考えられる。しかし、山岸（1998）が考える「信頼」の概念によれば、Bが自己利益を求めて自分に不利益をもたらすようなことがなく、期待通りに目的が達成される（やるといったことをちゃんとやる気がある）と判断し、確信もしているが、判断材料の中に（Aが持つ）Bの意図についての情報量が充分であるかどうかということや、Bが依頼された行動についての遂行能力を有しているか否かは含まれないということである。

### 1.3 親に対する信頼の構成概念

親に対する信頼の構成概念は、先行研究の中でも、また、信頼の対象によっても少しずつ異なる。親に対する信頼感を測る尺度のうち、下位尺度すべてが子どもから親への信頼感を測る項目で構成されているものには、酒井（2005）の「青年期版対人的信頼感尺度」と中井（2013）の「STM尺度」及び「STF尺度」がある。

酒井（2005）は、子どもが重要な他者に対して抱く信頼を「相手に対する信頼（“信頼している”感覚）」と「相手も自分に対してそうした期待を持っていて、自分のことを信頼してくれているという相手から期待されている感覚（“信頼されている”感覚）」という二つの視点から見る提案をしている。酒井（2005）はまず、対人的信頼感を「親、きょうだい、親友、恋人など各発達段階での重要な他者との関係における自分と相手の互いに対する存在価値を考慮し、その相手が自分の幸

福を願い、裏切ることがなく、自分もその相手の幸福を願い、裏切ることがないと相手を感じているだろうという双方向的な個人の主観的感覚である。この感覚は、生後から始まる重要な他者との日々の体験のほかに、子ども自身が持つパーソナリティ傾向などの個人差要因や、広範な環境要因の影響を受けて形成されるものである。」と定義づけた。そして、質問紙を作成するにあたり、項目を先行研究から抽出した「信頼」の領域に関する7つの構成要素（「信頼」「好意」「安心・安全に基づく幸福感」「正直さ・誠実さを含む自己開示」「存在価値」「受容・理解」「情緒的サポート」）について、定義に基づき、“相手の自分に対する評価を表すもの”と“自分からの相手に対する評価を内容とするもの”の2モードで表した。2因子を仮定したプロマックス回転による分析の結果、「信頼している感」、「信頼されている感」の2次元構造を見出しているが、主因子法による因子分析の結果では、1因子のみ抽出されていることもあり、1次元性の高い尺度であるという説明が付されている（Table 1）。

酒井（2005）による対人的信頼感の定義には、「相手が自分の幸福を願い、裏切ることがなく、自分もその相手の幸福を願い、裏切ることがないと相手を感じているだろう」という相手の人間性についての判断が含まれており、山岸（1998）の定義と同様に双方向的感覚であると言えよう。加えて、「親、きょうだい、親友、恋人など各発達段階での重要な他者との関係における自分と相手の互いに対する存在価値を考慮」という部分からは、この感覚が相手との関係性によっても影響を受けつつ形成されるということが読み取れる。この点においても、酒井（2005）の定義は山岸（1998）の定義と共通していると考えられる。

当該研究において、青年期における重要な他者とは母親、親友、恋人を指し、父親についてのデータは収集されていない。しかし、安達・菊池・木村（1987）及び安達（1994）は、青年期においても両親が重要な存在であり続けることを指摘し

Table 1 青年期版対人的信頼感尺度、STM尺度及びSTF尺度の特徴

	青年期版 対人的信頼感尺度	STM尺度	STF尺度
回答者	青年期の男女	中学生の男女	中学生の男女
質問対象	母親・親友・恋人	母親	父親
尺度の 構成要素	「信頼している感」 「信頼されてる感」	「役割遂行評価」 「安心感」「不信」	「安心・信用」「不 信」「親近感」
項目数	14	30	30
性質	1つの領域につき、相 手の自分に対する評価 と自分の相手に対する 評価を内容とする2つ の主観的評価を行う。 特定他者に対する信頼 感を総合的に測定可能。	子どもから見た母親役 割の遂行状況と親子の 関係性が反映されるよ うな項目内容である。	2因子の解釈も可能で ある。父親役割の遂行 状況よりも父親の人間 性と親子の関係性が反 映されるような項目内 容である。

STM: Junior High School Students' Trust in Mother (中井, 2013)  
STF: Junior High School Students' Trust in Father (中井, 2013)

ている。また、安達(1994)は、「社会的知識・技能の習得に関わる他者」「態度・価値の形成に関わる他者」「性役割の習得に関わる他者」「信念・理念の形成に関わる他者」「葛藤の解決・自己の安定に関わる他者」「親密性の形成に関わる他者」の6つの側面において青年期における重要な他者を見出しており、重要な他者として選択された人物は父、母、恋人、友人から歌手まで46種のカテゴリーにわたっているが、いずれの側面においても1位であるとして選ばれた人物の上位5番目までに父親と母親の両方が入っている。

青年期の子どもにとっての両親の位置づけを考えた場合、Engfer(1988)のスピルオーバー仮説では、両親の関係が親子関係に影響を及ぼすということを論じており、また、板倉・長谷川(2012)でも父母の結びつきが弱い家庭の青年が抱く父親のイメージや母親の父親のイメージが共に否定的であることが報告されている。このように、子どもから見た親のイメージは、夫婦関係にも影響されうるものであり、父親についてのデータの欠落は、尺度の作成に当たって重要な影響を及ぼしたと考えられる。

中学生の子の親に対する信頼感の構造を分析した中井(2013)は、信頼できる親像についての自由記述を整理して作成した質問紙を用いて調査を行い、因子分析により母親、父親別にそれぞれ3

因子を抽出している(Table 1)。母親について抽出された「役割遂行評価」は、父親については抽出されておらず、そのことについて、子どもにとって父親が家庭内で果たす父親としての役割が見えにくい状況によるものと推察している。中井(2013)は信頼感を「母親(父親)を信じて頼ること、母親(父親)の行動の予測可能性、母親(父親)との関係に対する自信と安心感、母親(父親)としての資質や能力に対する役割期待を含む」と定義し、Eriksonによる信頼の定義を援用しつつ、信頼感においては「関係性が壊れないであろう」という安心感が重要であると指摘している。

中井(2013)による信頼感の定義には、酒井(2005)・山岸(1998)の両方の定義にある、相手の人間性への期待が含まれている。酒井(2005)・山岸(1998)の定義のように双方向の感覚であるかどうかは明示されていないが、関係性が重要であるという点では双方向の感覚であるとも考えられる。一方で、中井(2013)が見出した信頼感の尺度の構成要素には、山岸(1998)が除外した安心や能力への期待が含まれている。このことから、中井(2013)による信頼感は、山岸(1998)が示す「道徳的秩序」以下の概念すべてを指すものと考えられる。

## 2. 目的

家庭は、子どもにとって主たる生活の場であり、親をはじめとする家族構成員から長期間にわたって影響を受け続ける場でもある。先行研究からは、信頼関係が親子の関係性を左右する要因の一つであることが窺えた。したがって、親子の信頼関係の形成及びそれを土台とする親子関係の構築は、子どもの人間形成及び他者との関係の基礎づくりに多大な影響を及ぼすと考えられる。

しかし、先行研究を概観することにより、信頼の構成概念が研究者によって、また信頼の対象によっても異なることが明らかになった。さらに、下位尺度すべてが子どもから親への信頼感を測る項目で構成され、青年期の子の父親と母親に対する信頼感を同時に測定できる尺度はほぼ見当たらない。

そこで、本研究の目的を青年期の子の親に対する信頼感を一体的に測れる尺度（親子の信頼感尺度）を作成し、信頼性と妥当性を検証すること、および尺度の構成概念の検討により、信頼できる親のイメージを見出すこととする。同時に、尺度の活用によって親としての課題に対する認識を促し、親子関係を再構築するための一助となることを目指す。

## II 方法

### 1. 尺度の作成

2013年2月1日から5月31日までの間に、A、Bの二つの県の大学において、授業時間のうち15分程度を利用し、大学生及び大学院生を対象に、「信頼できる親」について自由記述により回答を求めた。

得られた自由記述による回答を、心理学専攻学生2名、心理学分野の博士課程学生1名、及び心理学の研究者1名により父親を対象に回答されたものと母親を対象に回答されたものを分けてKJ法の援用により分類した。さらに、処理済みの父親の項目と母親の項目を合わせ、内容が類似したもの、重複したものを整理し選定した結果、47項

目が得られた。これらに、構成概念妥当性の検証に用いた天貝（1995；1997）の「信頼感尺度」のうち、「他人への信頼」の項目8項目、「不信」の項目10項目の計18項目（通常項目14項目、逆転項目4項目）を加え、計65項目の質問紙を作成した。天貝の「信頼感尺度」は本来、「他人への信頼」「不信」に「自分への信頼」6項目を加えた3因子構造24項目で構成されているが、「親子の信頼感尺度」は子どもから親への信頼を測る尺度であるため、「自分への信頼」6項目は省いて使用した。回答方法は、「1：まったくあてはまらない」「2：あまりあてはまらない」「3：どちらともいえない」「4：ややあてはまる」「5：かなりあてはまる」の5件法とし、それぞれの項目に対してどのくらいそう思うか、あてはまる数字を選択するよう求めた。

### 2. 質問紙調査

2013年6月1日から2014年3月31日までの間に、A、Bの二つの県の大学において、授業時間のうち15分程度を利用し、大学生及び大学院生を対象に質問紙調査を実施した。回答のあった328名のうち、不備のあるものを除く男性91名、女性221名の合計312名分の回答が有効であったが、回答対象者が「両親以外の保護者」であった4名分の回答を分析対象から除外した。その結果、分析対象は男性89名、女性219名の合計308名分の回答となった。

### 3. 統制変数

性別 男女の区別を設けた。

対象 誰についての回答であるか、父親、母親、両親以外の保護者の区別を設けた。

### 4. 倫理的配慮

回答を依頼するにあたり、調査の目的と内容の説明後、回答は統計的に処理され、個人が特定されることなく個人情報保護が順守されること、回答は強制されるものではなく、参加は任意であ

ることを説明した。

## 5. 因子分析

統計処理は清水（2016）が開発した心理統計分析用のフリーソフトHAD16.0を用いた。データの予備的分析により、全47項目のうち30項目が天井効果を、1項目がフロア効果を示した。残る16項目について因子分析を行うにあたり、まず、固有値1.0以上を因子数の抽出基準とし、スクリープロットを検討したのち、最尤法・プロマックス回転により探索的因子分析を行った。1度目の因子分析の結果、因子負荷量が.40未満の項目が2項目認められた。そこで、それらを削除し、残った14項目について再度、因子分析を行った結果、最終的に3因子が抽出された。「信頼感尺度」（天貝、1995；1997）は妥当性の検証のために用意したものであるため、因子分析は予備的分析の結果、残った16項目について行った。

## 6. 信頼性の検討

抽出される各因子について $\alpha$ 係数を求めた。また、最初の調査において再検査法の実施を目的とし、再検査可能な者については質問紙に学籍番号を記載するよう依頼した。最初の調査から約4週を置いて再度調査を行ったところ、133名分の回答が得られたため、学籍番号によりデータを照合し、分析を行った。回答に不備のあるものを除く132名分のデータをもとに信頼性係数を求めた。

## 7. 因子不変性の確認

尺度の因子不変性を確認するため、探索的因子分析の結果に基づいて作成されたモデルについて、各区分によるデータ群を用いて適合度指標を算出した。モデリングの際には潜在変数として各因子を想定し、観測変数として各因子に対する項目を選定した。分析にはHAD16.0を用いた。

### (1) 性別

回答者の性別で区分した2群を用いて適合度指標を算出した。検証は、因子負荷量については因子分析と同じ.40以上とした。分散は1とし、因子間に相関があると仮定されることから①共分散の等値制約なし、②算出した推定値にて共分散を等値制約する、という2つの条件下で行った。

### (2) 回答対象者

回答対象者（父母）で区分した2群を用いて、(1)と同条件により検証した。

### (3) 交差妥当性

性別と回答対象者で区分した4群を用いて、(1)および(2)と同条件のもと、多母集団同時因子分析による検討を行った。

## 8. 基準関連妥当性の確認

天貝（1995；1997）の「信頼感尺度」を用いて、本研究において探索的因子分析により抽出された各因子との相関係数を算出した。

## Ⅲ 結果

### 1. 記述統計量

Table 2に回答者に関する記述統計量を示した。

### 2. 探索的因子分析

因子分析の結果、最終的に3因子が抽出された（Table 3）。第1因子には、第3因子と負の相関

Table 2 回答者（最終的な分析対象）に関する記述統計量

		割合
人数	308	
	男性	89 28.9%
	女性	219 71.1%
平均年齢 (SD)	19.7	(3.57)
回答対象		
	父親	85 27.6%
	母親	223 72.4%

Table 3 親子の信頼感尺度の探索的因子分析結果（プロマックス回転後）

項目	F1	F2	F3	共通性	M(SD)
<b>第1因子 受容 (<math>\alpha=.89</math>)</b>					
35自分の状況をいつも把握していると思う	<b>.949</b>	-.093	-.163	.6963.21 (1.17)	
36自分の立場で物事を考えようとしてくれる	<b>.807</b>	.032	-.045	.6473.29 (1.07)	
30自分の感情をありのままに受け止めてくれる	<b>.785</b>	.016	-.014	.6203.86 (1.10)	
43家族一人ひとりの状態を把握している	<b>.731</b>	-.013	-.073	.4783.68 (1.08)	
27甘えることができる	<b>.644</b>	.053	-.068	.4163.68 (1.30)	
33自分の考えを尊重してくれる	<b>.571</b>	.041	.167	.4783.98 (1.00)	
41約束を守る	<b>.556</b>	-.037	.183	.4143.94 (0.99)	
7言動が一致している	<b>.439</b>	.097	.294	.4793.50 (1.12)	
<b>第2因子 尊敬 (<math>\alpha=.76</math>)</b>					
9物事に対して広く興味・関心を持っている	-.085	<b>.860</b>	.018	.6733.64 (1.17)	
11向上心を持っている	.026	<b>.823</b>	-.074	.6663.75 (1.07)	
21あなたが質問したことを詳しく調べてくれる	.245	<b>.419</b>	-.004	.3493.22 (1.21)	
<b>第3因子 信念 (<math>\alpha=.68</math>)</b>					
45感情的になりやすい	-.135	.008	<b>.727</b>	.4542.60 (1.32)	
15意見を押し付けられたと感じたことがある	-.069	-.073	<b>.632</b>	.3432.84 (1.35)	
47自分の間違いを認めない	.194	.012	<b>.599</b>	.5163.24 (1.29)	
因子寄与	5.00	3.14	2.60		
累積寄与率	35.7	58.1	76.7		
因子間相関	F1	-	.565	.483	
	F2		-	.327	
	F3			-	

を示し家族の思いや立場を理解し受け入れるような項目と、第3因子と正の相関を示し家族の思いを理解して受け入れるような項目が含まれていると考えられるため、「受容」と命名した。第2因子には、大人としての視野の広さや親自身の成長を意識する姿を示すような項目が含まれていると考えられるため、「尊敬」と命名した。第3因子には、第1因子と負の相関を示し、親が子どもに本気でぶつかっていくような様子を示す項目と、第1因子と正の相関を示し、自分の考えを押し通すような項目が含まれていると考えられるため、「信念」と命名した。

### 3. 信頼性の検討

#### (1) $\alpha$ 係数の算出

尺度の内的整合性を検討するため、各下位尺度

についてCronbachの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、Table 3に示したように、第1因子で $\alpha=.89$ 、第2因子で $\alpha=.76$ 、第3因子で $\alpha=.68$ と、第3因子の係数がやや低かったものの、各下位尺度にある程度の内的整合性が確認された。

#### (2) 再検査法

一度目の調査の得点と2度目の調査の得点との相関関係は、尺度全体で $r=.76$  ( $p<.001$ )と、十分な信頼性が確認された。

### 4. 妥当性の検討

モデルをFigure 2に、①共分散の等値制約なし②共分散を算出した推定値にて等値制約という各条件下におけるパス係数をTable 4～9に示す。

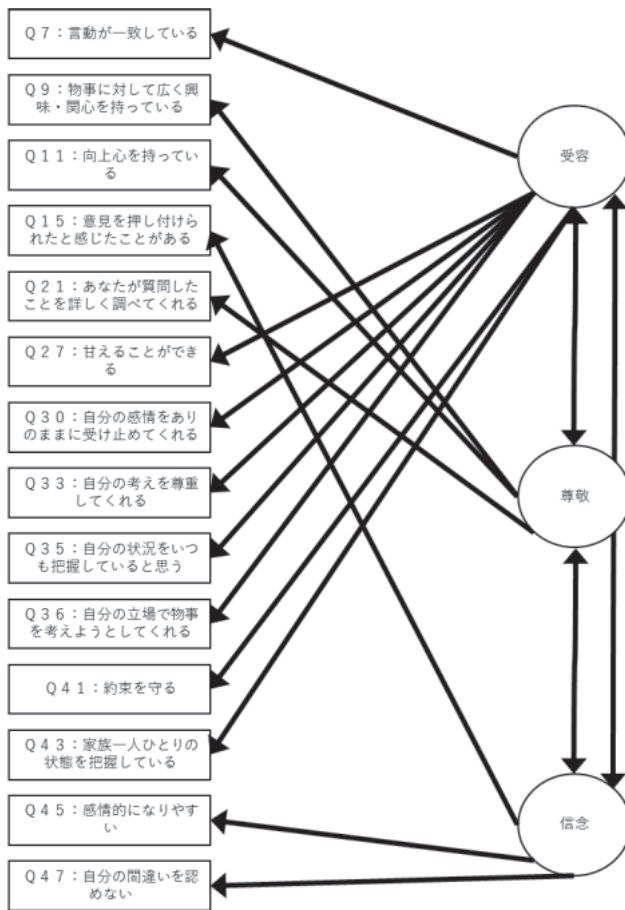


Figure 2 親子の信頼感尺度の各項目と尊敬できる親のイメージとの関連

### (1) 性別

検討の結果、①の条件下では、 $\chi^2=307.70$ 、CFIが.910、RMSEAが.084、GFIが.876であった。②の条件下では、 $\chi^2=347.43$ 、CFIが.891、RMSEAが.091、GFIが.862であった。GFIが許容水準をやや下回るものの①・②のどちらの条件下においてもRMSEAは十分な値を示した。サンプルサイズが300ということもあり、RMSEAの数値を採用した。これによりデータとモデルの適合は基準をおおむね満たしていると判断した (Table 4・5)。

### (2) 回答対象者

検討の結果、①の条件下では、 $\chi^2=301.47$ 、CFI

が.916、RMSEAが.082、GFIが.876であった。②の条件下では、 $\chi^2=331.40$ 、CFIが.902、RMSEAが.087、GFIが.866であった。GFIが許容水準をやや下回るものの、①・②のどちらの条件下においてもRMSEAは十分な値を示した。(1)と同様の基準により、データとモデルの適合は基準をおおむね満たしていると判断した (Table 6・7)。

### (3) 交差妥当性

多母集団同時分析による検討の結果、①の条件下では、 $\chi^2=525.32$ 、CFIが.881、RMSEAが.100、GFIが.825であった。また、②の条件下では、 $\chi^2=582.35$ 、CFIが.857、RMSEAが.108、GFIが.811



Table 4 (性別) 条件①におけるパス係数と因子間の相関係数

	男性	女性
受容 ⇒ Q7	.52**	.70**
⇒ Q27	.57**	.66**
⇒ Q30	.80**	.79**
⇒ Q33	.71**	.66**
⇒ Q35	.81**	.77**
⇒ Q36	.78**	.81**
⇒ Q41	.64**	.62**
⇒ Q43	.68**	.67**
尊敬 ⇒ Q9	.68**	.83**
⇒ Q11	.80**	.82**
⇒ Q21	.69**	.55**
信念 ⇒ Q15	.64**	.49**
⇒ Q45	.81**	.63**
⇒ Q47	.62**	.75**
受容 ⇄ 尊敬	.63**	.56**
受容 ⇄ 信念	.00	.68**
尊敬 ⇄ 信念	-.16	.48**

\*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$ , \*\*\*:  $p < .001$

Table 5 (性別) 条件②におけるパス係数

	男性	女性
受容 ⇒ Q7	.55**	.68**
⇒ Q27	.57**	.66**
⇒ Q30	.81**	.78**
⇒ Q33	.74**	.65**
⇒ Q35	.82**	.77**
⇒ Q36	.79**	.80**
⇒ Q41	.66**	.61**
⇒ Q43	.69**	.67**
尊敬 ⇒ Q9	.73**	.82**
⇒ Q11	.81**	.81**
⇒ Q21	.69**	.54**
信念 ⇒ Q15	.50**	.49**
⇒ Q45	.59**	.64**
⇒ Q47	.89**	.73**

\*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$ , \*\*\*:  $p < .001$

Table 6 (回答対象者) 条件①におけるパス係数と因子間の相関係数

	父親	母親
受容 ⇒ Q7	.65**	.68**
⇒ Q27	.83**	.56**
⇒ Q30	.89**	.75**
⇒ Q33	.70**	.70**
⇒ Q35	.81**	.78**
⇒ Q36	.78**	.80**
⇒ Q41	.75**	.57**
⇒ Q43	.75**	.65**
尊敬 ⇒ Q9	.85**	.77**
⇒ Q11	.83**	.81**
⇒ Q21	.76**	.48**
信念 ⇒ Q15	.44**	.51**
⇒ Q45	.61**	.60**
⇒ Q47	.84**	.77**
受容 ⇄ 尊敬	.77**	.52**
受容 ⇄ 信念	.46**	.60**
尊敬 ⇄ 信念	.27*	.34**

\*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$ , \*\*\*:  $p < .001$

Table 7 (回答対象者) 条件②におけるパス係数

	男性	女性
受容 ⇒ Q7	.63**	.67**
⇒ Q27	.83**	.56**
⇒ Q30	.88**	.75**
⇒ Q33	.69**	.69**
⇒ Q35	.80**	.79**
⇒ Q36	.76**	.80**
⇒ Q41	.74**	.57**
⇒ Q43	.74**	.65**
尊敬 ⇒ Q9	.88**	.77**
⇒ Q11	.80**	.79**
⇒ Q21	.76**	.49**
信念 ⇒ Q15	.45**	.50**
⇒ Q45	.60**	.61**
⇒ Q47	.82**	.76**

\*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$ , \*\*\*:  $p < .001$

であった。②の条件下では、①の条件下で得られた結果に比べてパス係数が改善され、モデルの適合度は高まったものの、データの適合度はやや低下した。しかし、RMSEAの値を採用した場合、データとモデルの適合は基準をおおむね満たしていると判断した。 $\chi^2$ 乗検定の結果が有意となったのは、サンプル数が300を超えていたためであろう。

#### (4) 基準連関妥当性

Table10に、天貝(1995;1997)の「信頼感尺度」各下位尺度と親子の信頼感尺度の各下位尺度との相関係数を算出した結果を示した。「受容」は「他者への信頼」と正の相関、「不信」と負の相関を示した。「尊敬」は「不信」と負の相関を示した。「信念」は「不信」と負の相関を示した。

Table 8 (多母集団同時分析) 条件①におけるパス係数と因子間の相関係数

	男性→父親	男性→母親	女性→父親	女性→母親
受容 ⇒ Q7	.52**	.63**	.74**	.69**
⇒ Q27	.83**	.29*	.82**	.62**
⇒ Q30	.82**	.77**	.91**	.75**
⇒ Q33	.76**	.70**	.62**	.69**
⇒ Q35	.77**	.87**	.83**	.76**
⇒ Q36	.71**	.85**	.82**	.80**
⇒ Q41	.73**	.56**	.80**	.56**
⇒ Q43	.78**	.51**	.72**	.67**
尊敬 ⇒ Q9	.79**	.41*	.93**	.80**
⇒ Q11	.91**	.49**	.72**	.83**
⇒ Q21	.81**	.76**	.72**	.48**
信念 ⇒ Q15	.09	.64**	.59**	.47**
⇒ Q45	.09	1.12**	.84**	.57**
⇒ Q47	3.69	.51*	.70**	.75**
受容 ⇄ 尊敬	.79**	.71**	.64**	.53**
受容 ⇄ 信念	.13	-.19	.54**	.73**
尊敬 ⇄ 信念	.08	-.12	.39*	.48**

\* :  $p < .05$ , \*\* :  $p < .01$ , \*\*\* :  $p < .001$

Table 9 (多母集団同時分析) 条件②におけるパス係数

	男性→父親	男性→母親	女性→父親	女性→母親
受容 ⇒ Q7	.51**	.67**	.73**	.67**
⇒ Q27	.82**	.32*	.82**	.61**
⇒ Q30	.83**	.79**	.90**	.74**
⇒ Q33	.77**	.76**	.60**	.67**
⇒ Q35	.77**	.88**	.82**	.76**
⇒ Q36	.69**	.86**	.81**	.80**
⇒ Q41	.73**	.61**	.79**	.54**
⇒ Q43	.78**	.56**	.71**	.66**
尊敬 ⇒ Q9	.80**	.70**	.96**	.79**
⇒ Q11	.90**	.73**	.70**	.82**
⇒ Q21	.82**	.53**	.70**	.48**
信念 ⇒ Q15	.36*	.83**	.59**	.44**
⇒ Q45	.43*	.91**	.83**	.56**
⇒ Q47	.99**	.70**	.70**	.77**

\* :  $p < .05$ , \*\* :  $p < .01$ , \*\*\* :  $p < .001$

Table10 相関係数

	受容	尊敬	信念
他人への信頼	.31***	.11	.07
不信	-.22***	-.13*	-.24***

\* :  $p < .05$ , \*\* :  $p < .01$ , \*\*\* :  $p < .001$

## IV 考察

### 1. 信頼性

$\alpha$ 係数の算出及び再検査法による検討の結果、 $\alpha$ 係数については第3因子の係数が $\alpha=.68$ と、.70をやや下回ったものの、第1因子及び第2因子についてはそれぞれ.89、.76と十分な値を示した。再検査法についても、 $r=.76$ と、.70を上回る十分な値を示した。これにより、尺度にある程度の信頼性が確認されたと判断した。

### 2. 妥当性

探索的因子分析の結果に基づいて作成されたモデルについて、性別、回答対象者、性別×回答対象者のそれぞれの区分によるデータを用いて適合度を検討したところ、いずれの適合度指標の値もおおむね基準を満たしていることが示された。サンプルサイズを考慮すると、データとモデルの適合度は十分であると判断した。

性別×回答対象者の区分による交差妥当性の検討は、多母集団同時分析により因子負荷量及び分散を等値制約し、共分散を①等値制約なし②算出した推定値にて等値制約する、の2条件にて比較検討した。適合度指標の値からは、因子負荷量、分散のみ等値制約する条件下であっても、因子負荷量、分散、共分散のすべてを等値制約する最も制約の大きい条件下であっても妥当性がおおむね許容範囲であると判断された。

各区分による適合度の検討により、統制変数によって母集団を分けずに単一母集団として解析しても差し支えないと判断した。本研究は全国規模のものではなく、サンプルサイズも300人強と大きくはないが、回答者の性別や回答の対象者（父母）が異なっても同一の尺度を使用できる可能性があることを示唆している。

本研究では、「親子の信頼感尺度」の3因子と天貝（1995；1997）の「信頼感尺度」の各下位尺度（Table10）との相関係数を算出した。「親子の信頼感尺度」の第1因子「受容」と「信頼感尺

度」の「他人への信頼」が正の相関を示したことについて、「受容」には親が家族の思いや立場を理解し尊重するような項目が含まれており、「信頼感尺度」の下位尺度「他人への信頼」にも自他が互いに信頼しあう状態を評価するような項目が含まれていることが理由として考えられる。「受容」と「信頼感尺度」の下位尺度「不信」の関連については、「不信」が他者を疑い、いつか自分を裏切る可能性があると感じるような項目で構成されていることから、負の相関を示したと考えられる。

「親子の信頼感尺度」の第2因子「尊敬」と「他者への信頼」との間には相関関係が認められなかったが、「信頼感尺度」の下位尺度「他人への信頼」には他者を尊敬するような項目が含まれていないことから、このような結果になったのであろう。また、「尊敬」と「不信」には負の相関が認められたのであるが、一般的に向上心があり、物事に対する興味や関心を持ち続ける人物は肯定的に捉えられることから、他者を否定的に捉える内容の項目で構成される「不信」と負の相関関係を示したと推察される。

「親子の信頼感尺度」の第3因子「信念」と天貝（1995；1997）の「他人への信頼」因子に相関関係が認められなかったことについて、「信念」には子どもから親への接し方を評価するような項目が含まれていなかったことが影響したものと考えられる。また、「信念」と「不信」においては負の相関が示された。このことに関して、「信念」を構成する項目には親の考え方を感情的に押し付けるようなネガティブな印象があり、「不信」にも「今心から頼れる人にいつか裏切られるかもしれないと思う」や「今は何かと話せても、他人など全く当てにならないものである」というように、将来今の人間関係が覆されてしまうような他者への不信感を示す項目が複数含まれていることから、当初は正の相関が示されると仮定していたが、予想に反して負の相関が示された。一般的な対人関係であれば、「感情的になりやすい」「意見を押し

付けられたと感じたことがある」「自分の間違いを認めない」というような態度の相手と良好な関係を維持するのは難しいであろうが、親子関係という枠組みの中だからこそ、これらの「信念」の構成項目が親との信頼関係を損なう要因にはならず、むしろ信頼される要因として抽出されたということであろう。

### 3. 本研究で見出された青年期の子の信頼できる親のイメージ

因子分析を行った結果、「受容」「尊敬」「信念」という3因子が抽出された。まず、「受容」については、青年期の子どもにとって、親が自分を理解し子としてありのままに受け入れていると感じることが親への信頼につながることを示していると考えられる。この概念には、山岸(1998)によって信頼の概念から除外された「能力への期待」が含まれ、山岸(1998)、酒井(2005)、中井(2013)の信頼の定義に含まれる相手との関係性が示されている。

次に、「尊敬」であるが、この概念は山岸(1998)、酒井(2005)、中井(2013)のいずれの定義にも含まれておらず、酒井(2005)、中井(2013)の各尺度の構成要素にも含まれていないが、尊敬は相手の人格や行為に敬意を払うことを指すため、山岸(1998)による信頼の概念、及び酒井(2005)、中井(2013)の信頼の定義に含まれる相手の人間性への期待に近接する概念だと考える。安達(1994)は、青年期における意味ある他者の研究において、子どもにとって信念・理想の形成にかかわって意味を持つ人物(その人を理想化し、絶対的な尊敬と信頼をもってついていけると考えている人)として1位に選ばれた人物が男女ともに父、恋人・異性の友人、母の順に多かったことを報告している。青年期においては恋人が重要な位置を占めるようになってくることが併せて報告されているが、それでも親は子どもにとって意味ある他者であり、尊敬できる人物であるということが示されている。

「信念」は、中井(2013)のSTM及びSTFの構成要素である「不信」に含まれると考えられる。「信念」の各項目からは、自分の間違いを認めず、感情的に意見を押し付ける実直な親のイメージが想起されるが、子どもからみれば、ぶれないメッセージを伝える親は、むしろ肯定的に受け止められるのかもしれない。近藤(2015)は、親が子どもを本気で感情的に怒る(叱るではない)ことは、子どもにとって理不尽なことであったとしても実感として伝わるのではないかと指摘している。つまり、親の怒りを理屈として理解できるかどうかよりも、親の本気を実感できるかどうかのほうが重要であり、「信念」の因子が「受容」および「尊敬」の因子と正の相関がみられることから、この因子が親子の高い信頼関係を測る項目であると解釈できる。

「受容」「尊敬」「信念」という3つの因子について考察した結果、青年期の子の信頼できる親のイメージとして「子どもとしての自分を理解して受け入れ尊重し、自身が向上心を持ちつつ確固たる信念をもって生きている、尊敬に値する」人物が見出された。「(親として)子どもである自分を受け入れ尊重する」という部分には、山岸(1998)が信頼の概念から除外した能力への期待が含まれており、山岸(1998)、酒井(2005)、中井(2013)のいずれにも含まれる相手との関係性が示されている。この定義において、双方向の感覚であるかどうかは明示されていないが、相手との関係性が示されているという点では双方向の感覚であるともいえるであろう。また、「自身が向上心を持ちつつ確固たる信念をもって生きている、尊敬に値する」という部分には、山岸(1998)、酒井(2005)、中井(2013)のいずれにも含まれる相手の人間性への期待が含まれており、なかでも「信念をもって生きている」という部分は、中井(2013)のSTM尺度及びSTF尺度の構成要素である「不信」にも含まれると考えられる。

この、自分の間違いを認めず、感情的に意見を押し付けるという、一般的な人間関係においては

ネガティブに働く要素が抽出された背景には、親の子どもに対する働きかけやかかわりが、子どもと真剣に向き合っている態度の現れであるという解釈が前提にあり、子どもにとって、言動がぶれない親はむしろ肯定的に受け止められるのではないかと考える。また、時として親が感情的になったとしても、真剣さが伝わるならば、子どもにとっては親からの愛情を感じ取る機会になるであろう。したがって、「信念」という因子が抽出されたことは、いつも冷静で淡々としている親よりも、時に情動に突き動かされて自分に対峙する親が肯定的に受け止められていることの現れであると推察される。また、この解釈において、相手が親であるという点からも、社会的不確実性は存在しないと考えられ、この親に対する信頼感には、山岸(1998)の「安心」の概念も含まれると考える。したがって、このイメージにおける「信頼」の指す概念は、山岸(1998)のいう「道徳的秩序」以下の概念を含んでおり、中井(2013)の定義に一番近いと考えられる。

## V 今後の課題

本研究では、表現は異なるものの、先行研究と近い概念での「信頼できる親」のイメージを見出すことができたと考える。尺度については、予備的分析において天井効果・フロア効果を示した項目を削除した結果、16項目のみが残った。質問紙を5件法で作成したのであるが、今後実施する際には7件法にすることを検討するべきかもしれない。その上で、さらに確認的因子分析を行い、信頼性・妥当性の検討を行うことも考える必要がある。ただ、本研究において採用されたモデルにおいても、ある程度の信頼性・妥当性が示され、回答者の性別や回答の対象者(父母)が異なっても同一の尺度を使用できる可能性があることが示唆されたと考えられる。

本尺度の調査対象は青年期の男女である。具体的な活用場面の一つとして、家庭環境や親子関係に起因すると考えられる子どもの問題行動への対

応及び家族への支援方法を検討する際、アセスメントの一つとして使用することを想定している。回答の合計得点を集計することにより、回答者から見た親の信頼感の高低が客観的に把握できる。同時に、因子ごとに集計し、得点割合を算出することで、各側面の高低についても把握が可能である。例えば、「受容」の得点割合が高い一方で「尊敬」や「信念」の得点割合が低い場合、子どもは自分の親を「家族に目を向け大切にしており、頭ごなしに叱ったり自分の考え通りに動かそうとしたりするようなことはないように感じる。しかしその一方で、世間の出来事に関心を持ったり知識を得て自分自身を高める努力をしたりするような姿は見られない。」というように解釈することが可能であろう。このような結果は、「回答者による親評価」として回答者の親への信頼度を把握するだけでなく、子どもが捉えた「親としての自分の姿及び課題」として親に示すことによって、親としての課題についての認識を促すことができよう。また、結果を一つの手がかりとして支援を継続することにより、親子関係の再構築を目指すこともできると考える。

ただ、尺度の使用にあたっては、尺度の結果が父親と母親で「同じである必要はない」ということ、回答者の評価に恣意性が避けられないことを認識しておくことが必要である。

家庭における子どもの人間形成は重要である。Martin(2007)が指摘するように、家庭とは、単に家族が生活をともにする空間であるだけでなく、人間関係が土台となる安らぎの場でもある。

本尺度の活用により、今後の研究が、すべての人間関係の原点となる家庭の人間関係を見直し、親子関係を再構築することによって子どもが自らの家庭に居場所を見出すための一助となることを目指す。

## 引用文献

安達喜美子・菊池 龍三郎・木村 清一「大学生の生活に影響を及ぼす他者の意味：「意味あ

- る他者」研究の新しい手掛かりをもとめて」, 茨城大学教育学部紀要 (教育科学) 36, 1987, 173-187
- 安達喜美子「青年における意味ある他者の研究：とくに、異性の友人 (恋人) の意味を中心として」, 青年心理学研究6, 1994, 19-28
- 天貝由美子「高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響」, 教育心理学研究43, 1995, 364-371
- 天貝由美子「成人期から老年期に渡る信頼感の発達：家族および友人からのサポート感の影響」, 教育心理学研究45 (1), 1997, 79-85
- Barber, B. *The logic and limit of trust*. New Brunswick : Rutgers University Press, 1983
- Engfer, A. The interrelatedness of marriage and the mother-child relationship. In R.A. Hinde & J.S.Hinde (Eds.), *Relationships with in families : Mutual influences*. New York : Oxford University Press, 1988, 104-118
- Farrington, D.P. The Family backgrounds of aggressive youths. In L.A. Herson, M. Berger, & D.Shaffer (Eds.), *Aggression and antisocial behavior in childhood and adolescence*. Oxford : Pergamon, 1978
- Flannery, D.J., Williams, L.L., & Vazsonyi, A.T. Who are they and what are they doing ? Delinquent behavior, substance use, and early adolescents' after-school time. *American Journal of Orthopsychiatry* 69, 1999, 247-253
- Fondacaro, M.R., & Heller, K. Social support factors and drinking among college student males. *Journal of Youth and Adolescence* 12, 1983, 285-299
- 藤田敦・丸野俊一「親の叱りことばの受容過程における子どもの状況認知の役割」, 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門) 37 (2), 1992, 133-142
- 板倉憲政・長谷川啓三「青年期の親子関係と父母関係の関連性に関する基礎研究」, 対人社会心理学研究12, 2012, 85-91
- 近藤卓『乳幼児期から育む自尊感情』, エイデル研究所, 2015
- 松田君彦・小嶋晃代「親の叱りことばの表現と子どもの受容過程に関する研究 (1)」, 鹿児島大学研究紀要 教育科学編54, 2002, 187-203
- Martin, J.R. *Rethinking Schools for changing Families*, Harvard University Press, 1992, 121-127 生田久美子 (訳) 『スクールホーム <ケア>する学校』東京大学出版会, 2007
- 中井大介「中学生の親の対する信頼感と学校適応感との関連」*発達心理学研究* (4) 24, 2013, 539-551
- 酒井厚『対人的信頼感の発達：児童期から青年期へ』川島書店, 2005
- 清水裕士「フリーの統計分析ソフトHAD：機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案」, *メディア・情報コミュニケーション研究* 1, 2016, 59-73
- 昌子武司『親子関係と情緒』教育出版, 1985
- Patterson, G.R. Maternal rejection : Determinant or product for deviant child behavior ? In W. Hartup & Z. Rubin (Eds.), *Relationships and development*. Hillsdale, NJ : Erlbaum, 1986
- Wills, T.A., & Cleary, S.D. How are social support efforts mediated ? A test with parental support and adolescent substance use. *Journal of Personality and social Psychology* 71, 1996, 937-952
- 山岸俊夫『信頼の構造』東京大学出版会, 1998